

(1) フレームワークプランにおける基本方針等

— 目標像 —

地域に根ざし、グローバルに展開する未来志向の研究拠点大学

— 基本方針 —

未来志向の学術研究拠点形成のための基盤づくり

未来を生き抜くプロフェッショナルの養成と国際的に卓越した先導的研究を支える機能強化、施設・環境の整備により拠点形成を推進する基盤づくりを行う。

学都熊本を牽引する個性と創造性あるキャンパス形成

個性と創造性ある教育と交流のためのキャンパス空間の整備と、蓄積された歴史及び文化遺産の知的価値の創造と活用を推進し「学都熊本」を牽引する。

サステイナブル社会のモデルとなるキャンパス機能強化

エコキャンパスの構築と様々な環境対策の実験的取組を通してサステイナブルな社会のモデルとなるようなキャンパス内の機能強化を図る。

— 整備方針 —

整備方針を FIGSS 5（フィクス・ファイブ）として設定する。

① **Flexibility** [変化への柔軟性]

- 高度化・多様化する教育研究活動に対応する機能の拡充
- 利用者ニーズへの対応と共同利用を促す既存施設の有効活用

② **Identity** [個性あるキャンパス環境の創造]

- 自然環境と歴史的資源を活かしたシンボリックな景観の形成
- 歴史あるものと新しいものが調和した心地よい環境の創出

③ **Community** [未来志向の教育研究を創出する交流の促進]

- 学部や大学の枠を超えた学内外交流の場の創出
- 留学生等外国人との交流を促すキャンパスの国際化への対応

④ **Safety** [安全・安心な環境の確保]

- 防災、治安等キャンパスの基礎的な安全の確保
- 情報セキュリティの管理や実験・実習等の教育研究環境における安全の確保

⑤ **Sustainability** [持続的な発展可能性]

- ライフサイクルコストの低減や社会実験等の取組による環境対策の推進
- 自然エネルギーへの転換や省エネ等による地球環境への配慮

(2) 各キャンパスの特徴

黒髪キャンパス

明治20年第五高等中学校の開校当時からの北地区と、明治39年熊本工業高等学校の開校当時からの南地区で構成される。重要文化財建造物が点在し、歴史と自然が残るキャンパスである。

メインキャンパスとして、文学系、法学系、教育学系、理学系、工学系で構成される教育研究機能と、全学の事務局機能、教育学部附属特別支援学校等で構成する。

本荘キャンパス

明治34年私立熊本医学校の附属病院として現地に移転立地したことに始まる。昭和20年に戦災で二の丸に移転するが、昭和39年の附属病院中央診療棟を皮切りに随時本荘地区へ移転帰還した。

医学系、附属病院、生命科学系先端研究センターで構成する。

大江キャンパス

私立九州薬学校が山崎町より現在の大江地区に移転したことに始まり、昭和24年の国立大学への移行の際に熊本大学薬学部として包括された。

薬学系で構成され、薬用植物園を併設する。

京町キャンパス

明治26年に熊本県尋常師範学校として現在地へ移転以降、官立熊本師範学校等を経て昭和24年に熊本大学の所管となり昭和26年に熊本大学教育学部附属小学校・中学校となった。

教育学部附属小学校・中学校で構成する。

城東町キャンパス

昭和期の熊本市立壺川幼稚園、熊本市立千葉城幼稚園、その後の各師範学校の附属幼稚園を経て、昭和26年に熊本大学教育学部附属幼稚園となる。昭和46年に現在の用地を取得し移設した。

教育学部附属幼稚園で構成する。

(3) 地区とエリアの関連性

キャンパス毎あるいはキャンパスの地区（公共道路で分断された一団の敷地）毎に、学部系、附属病院、附属学校等のエリアを設定する。将来的に機能の転地が必要になった場合は、キャンパス内での入れ替えを優先し、次に地区内、エリアの入れ替えを検討する。但し、附属学校はそれ自体が特殊な機能であり、かつセキュリティの問題もあり、本来の「キャンパス」整備とは意味が異なるため、独自の検討を行う。